

槍で夜襲に来る原住民との戦闘、手出しも出来ぬ連日の空襲、思い出は尽きないが、現在でもジャワ島プシヨン収容所の戦友会は続いている。何はともあれ、ボルネオ組の戦友との思い出話は、年老いた我々には何よりの楽しみであり、また、生き甲斐を感じさせる。

六年前、五人の戦友と、観光地ではない現地を六泊の日程で訪問した。山の形は変わらぬので、それぞれの思い出の場所は判った。現地人と話をしたら「日本のお陰で独立出来た」と感謝してくれた。独立をしてもチモールでは内戦があったが、平和が訪れることを願っている。私が歩いた所では皆、日本人に好感を持っていた。

昭和十九年後期、クダットで米軍機に宿舍がやられたので軍の資料も私物もことごとく焼かれてしまった。米軍の攻撃はジャングルも家も焼き尽くす。そのため、私には思い出の品々はほとんどない。しかし、現地を訪問した時の原住民の感謝の言葉と、示された好感が何にも勝る我々の戦争記念である。

## 軽巡「夕張」

### 乗組みから猿島警備

茨城県 磯山 喜恵

私は昭和十七（一九四二）年一月十日、横須賀海兵団に入隊しました。三カ月の訓練を受け、四月十日三等水兵として南方方面第六水雷戦隊「夕張」に配属され乗艦しました。

「夕張」は軽巡洋艦でトン数は一九八〇トン、艦長は大佐で、乗組員は二五〇人ぐらい、速力は四二ノットで、とても速い艦で、甲板に立っていたら倒れそうになるほどでした。私の勤務は水雷部員で魚雷を発射する仕事でした。

基地はトラック島に在り、ラバウル島方面の警備に当たるのが任務でした。訓練の厳しさは、口では言い尽くせません。大正年間に製作されたと思いますが、六三センチの直径の魚雷を発射する一六八センチの発

射管の掃除、それはそれは大変でした。何か陰気臭い毎日で厳しい訓練の連続でした。

南方地域をどのように行動したかは全く機密で私達には教えてくれないので判りませんでした。

「夕張」に乗艦中海戦に参加したのは、ミッドウェーの海戦、珊瑚海の海戦、マキン・タラワ島の夜襲戦。ガダルカナル島の奪回戦の四つの海戦でした。

任務が外廻りコースをとり警戒するのが作戦でありましたため、直接戦闘に参加することは少なく、ミッドウェー海戦も激戦でしたが、多くの主要艦船の損失等も、私共は全く聞くことはありませんでした。航空母艦「赤城」も大破されながらも、修理をして活躍したようです。

空には飛行機が一機、着弾点等を観測し連絡をとっていたようです。左に右にと空中観測しており、私達はオブザーバーのような行動でした。

空からの攻撃はほとんどなく、陸からの大砲の攻撃がすごかったのですが、ドンと打ってくるが命中する

ことはありませんでした。ジグザグで避けてたのです。ただマキン・タラワ島の夜襲攻撃の時は激しく、敵の大砲の弾丸がヒュッヒュッと飛んで来るし、一発が命中し、大砲の弾丸が入って抜けて行ったため、速力も七ノットくらいに落ち、艦は傾くし、もう駄目だと言いながら、ラバウルからトラック島に修理のため引き返す中で、伝声管で「助かるそうだ」と伝えて来たので、開いている穴を密閉し水を汲み上げました。

一時は死ぬとはこんなことかと思いましたが、伝声管で助かると聴いて一生懸命で水を汲み上げました。損傷もその部分だけですみました。艦はトラック島で修理が出来ました。

珊瑚海の海戦の時もオブザーバー的な行動でしたが、内容は少し違っていたようです。この地図の状況から見ると、激戦のようでした。

ガダルカナル島の奪回戦の時、大正時代の一番大きな魚雷をぶっ放しました。一万メートルくらいでも日本のはスクリュウが二枚羽で泡を消しますが、敵のは一枚羽で発見が早い、その点では大正時代の魚雷でし

たが、日本の方が優秀でした。

作戦についてははっきりわかりませんが、食料品等を少なくして弾丸を慌ただしく積み込むので、おおよその見当はつきますが、詳しくは知ることは出来ませんでした。

軍艦の沈没するのは見ませんでした。輸送船がトラック島からラバウルに向かう途中で沈没するのを見ました。あれには兵隊が乗船しているのになあと、思うと哀想でなりませんでした。

ガダルカナル島では上陸させては米軍にやられてしまふし、われわれ海軍はガダルカナル島の日本軍を奪回するため、ジグザグを繰り返して敵をおびき寄せ海上から攻撃するための作戦でしたが、竹槍を向かうのと同じで量的にも問題にならず、一発打てば十発飛んで来るし、手のつけようがなかったという以外に言葉がありませんでした。

海戦というのは軍艦と軍艦がすれ違った瞬間打ち合って勝負を決めることで、「夕張」も敵艦に向かってぶっ放したことはありますが、火花を見ただけで、

果たして撃沈したかどうかは確認することは出来ませんでした。

海軍の場合は、外は海だから逃げる場所がないので、いざ海戦という場合は一生懸命で、履いていた靴や靴下の脱げたのもわからないくらい、命をかけて戦いました。

白い鉢巻きに白い襷をかけて、一生懸命でした。白い鉢巻に白い襷をかけると、自ら悲壮な決意を湧き立たせます。それでも「もう駄目かな」と思った時は一時的でも兵隊の顔には悲しい表情が見えますが、また平然とした姿に戻り軍務に服します。それしか方法はありませんでした。

空から攻撃を受けてもハセンチの高射砲ではB29には届かないし、一発くらいは撃つけれどもあとはどうすることも出来ず、ジグザグに爆弾を避ける以外に方法はなかったのです。お陰で一人も負傷者は出ませんでした。軍艦には多少傷は受けましたが、四回の海戦では全然死傷者は出ませんでした。軍艦が破損した時は横須賀まで帰って修理をして、またトラック基地へ

と出て行きます。

上司の梅沢中尉から呼び出しを受けました。私達兵が中尉殿と話すことなどめったにないので、何事だろうと行きますと、身上書に書いてあったのでしょう「故郷には母と妹だけしかいないようだから地上勤務に帰りなさい。地上勤務も同じ軍務だからがんばれよ」と言ってくだったので、たまたま航空母艦「鳳翔」が甲板に傷を受け横須賀で修理するため帰るので、それに使乗させてもらって帰ることになりました。トラック島経由で一週間ぐらいかかりました。

「夕張」は、昭和十九年四月二十六日、ソソル島沖で撃沈されました。私は横須賀に帰っており、命拾いました。これも梅沢中尉のお陰と感謝しています。

昭和十八年四月、上等水兵に進級、横須賀第一警備隊猿島に配属となり、猿島砲台を警備することになりました。

猿島は横須賀港のすぐ前にある島で直径八〇〇メー

トルぐらいの面積の島に一二センチの艦砲二基が備えられていました。もともと八センチの砲でしたが、十二月に一二センチに改造してもらいました。

この島は以前ロシア兵の捕虜を使ってトンネルを掘らせ、砲台を置いていたのを造り替えていた小さな島でした。

要塞であるため一般人はおらず、六十人ぐらいの兵隊で防備しておりました。ただ一年に一回一般人に「のり」や「ひじき」を採らせていた以外は立ち入り禁止の島です。指揮者も兵隊ばかりで、特別に偉い人はおらず若い兵隊ばかりで、上等下士ぐらいの者が指揮する程度でした。

空襲については、鎮守府あたりに焼夷弾を落とすぐらいで、猿島自体は機銃掃射を受け二人負傷した兵がおりました。島自体への空襲はありませんでした。

食糧については、麦飯を食ったことはありませんでした。野菜類も缶詰にしたものを食べたので、食糧に困ることはありませんでしたが、島には水がないので毎日運んでくれました。

海兵団の場所と猿島は一〇〇〇メートルぐらいしか離れていませんので、上陸用舟艇が朝昼晩荷揚げ場に運んでくれました。風がある時は帆を掛けて、風がない時はエンジンをかけて来るという具合で、近い所だから種々の器材も運んでくれました。

終戦の情報も、鎮守府が近いので、どこから流れるのかわかりませんが、種々のキナ臭い情報が伝わって来ました。

八月十五日から二十六日まで、種々の整理をして上陸用舟艇で海兵団へ帰りました。後で聞いた話ですが、米軍が上陸して武装解除した書類等を、残務整理に残っていた二等下士から引き渡しを受けたそうです。猿島は海兵団の庭を埋め立てして近くしたので、ほんとに近い島で、内地に入る島です。

八月二十六日一曹に進級し、その日に着のみ着のままた夕方横須賀駅から東京の友達を訪ねて帰りました。勿論貰った服装だけは持って帰りました。東京の焼け野が原の中で浅草の渋文屋という友達の家にと泊した後、翌日家に帰りました。

今になって考えてみますと、軍艦が駄目だと思った時、十分か二十分ぐらい下向いて覚悟を決めた時の思い出、ミッドウエーの海戦も「善戦だ、善戦だ」と真実を教えられなかったこと、自分の進級のことが思い出に残っています。

運良く助けられて生きながらえている私は、多くの海軍の軍人が、尊い命を軍艦と共に海底深く沈んでいることを考えますと、御霊安かれと祈る気持ちいっぱいです。

併せてご遺族の悲しみを考えますと、二度と戦争はあってはなりません。日本がいつまでも平和であってほしいと祈りながら、この悲しみを一人でも多くの方々に語り伝えることが、私達に課せられた使命と自覚し、努力致します。